

出張報告書

平成28年2月26日

市議会議長 鳥居宏次 様

会 派 名 刷新クラブ

代表者氏名 京西 且哲

下記のとおり報告します。

記

1 目 的

- ① 姫路競馬場：姫路競馬場での場外馬券の販売について
- ② 姫路市役所：姫路市立小・中学校で使用されている古典・名文暗唱ノートについて

2 出 張 先

- ① 姫路競馬場：兵庫県競馬組合
- ② 姫路市役所：姫路市教育委員会

3 出張期間 平成28年2月12日(月)

4 出張者氏名 京西且哲・西田武史・金子拓矢

5 てん末報告 別紙とおり

報告書

会派名 刷新クラブ

代表者 京西 且哲

姫路競馬場：姫路競馬場での場外馬券の販売について

説明者：元治正明（兵庫県競馬組合姫路管理事務所所長）・進藤武敏
（兵庫県競馬組合姫路管理事務所課長）・佐古井次郎（兵庫県競馬組合総務部参事）

内 容：兵庫県競馬組合は、昭和54年自治省財政局よりの「競技の施行体制の確立及び収益の均てん化のため、競技場又は都道府県ごとに一部事務組合を設けて施行することが望ましいと考えられるので、一部事務組合の新設及び既存の一部事務組合への近隣市町村の参加の拡大等についても検討を行うこと。」の指導があり、この趣旨をふまえ、収益の均てん化と施行体制の一元化を図ることを目的として昭和55年に兵庫県競馬組合を設置した。

当組合では、園田競馬と姫路競馬を主とした運営をおこなっているが、組合開設以来、年々来場客数と売り上げの低下が進行し、売り上げはピーク118,033,596千円（平成2年）から39,241,512千円（平成26年）に落ち、来場者数はピーク2,032,783人（昭和55年）から467,940人（平成26年）に落ちこんでいる。この傾向は本市の競輪事業においても同じであるが、打開策として本場開催にとどまらず、場外馬券の売り上げに頼らざるをえない事は否めない。

今回の、主目的である兵庫県競馬組合と本市の場外馬券の販売についてであるが、本市の12月議会における説明では、

「競輪場の施設整備に伴う資金源として場外馬券の新設を行い、年間2億円の利益をそれに充当する。」事に関する調査であるが、これは、本市から兵庫県競馬組合に対して「売らせてほしい」とお願いしたのではなく、先方より近畿県内で過去に競馬場を持っていた自治体に対して発売場所を探しており、本市に白羽の矢が当たったらしい。また、場外馬券場を設置するためには、市議会の同意と周辺自治会の同意が有れば設置可能で、本市の様に現在競輪事業を営んで居ればよりスムーズに設置できるという。設置以降は、JRAの取り決めで1年間は地方競馬のみの販売に制約されており、それ以降はJRAが中央競馬も売って良いかの判断を下すそう。ここで、問題と感じた事は、万が一JRAの許可が出なければ本市の思惑の2億円の収入が得られない事、うまく行ったとしても委託料収入の割合は、地方競馬で11.42%に対してJRAが5%と低く、兵庫県競馬組合の話ではJRAは地方競馬の3倍の売り上げをあげないと健全運営が出来ないらしい。特に驚いたのは、兵庫県競馬組合の方々も驚かされていたのが、本市ではナイターが出来ない点である。現状の場外売り上げの大半を占めているのがナイターの売り上げであり、これが出来ない事については先方も驚きを隠せない状況であった。

まとめとして、今後の本市の競輪場の計画については、この内容を踏まえ、まず存続か廃止か、設置場所についても今ある課題を改善出来るならば別の場所に移転も含めて検討する必要がある。今の本市の厳しい財政状況から大きな資金のかかる事業である以上、慎重に進めるべきである。

姫路市役所：姫路市立小・中学校での使用されている古典・名文暗唱
ノートについて

説明者：平山智樹氏（姫路市教育委員会学校指導課指導係長）

森直子氏（姫路市教育委員会学校指導課管理指導主事）

内 容：姫路市は、平成２４年度までの少なくとも直近５年間に於いて、小学生及び中学生の国語力、取分け国語Ｂ（知能・技能を活用する力）の学力低迷が続いていた。全国・学力学習状況調査で国語Ｂは国内県内の両方において平均値以下であり、その改善が課題であった。

そこで平成２５年から新たな独自の試みを始めている。

姫路市が着目したのは、生徒の無回答率の高さである。無回答率が高いということは、読み取ったことをもとに自分の考えを書く力に課題があると判断した。そして、それを解決する為に何が必要かを考えた結果、語彙の不足が原因ではないかと仮説を立てた。語彙が不足しているから「読むこと」「書くこと」への抵抗感が生まれるのではないかとということである。

次に、仮説どおり語彙不足が原因とするならどう解決していくか。ここで国語教育に学識の高かった当時の教育長の発案で、既に、私立の学校では実践しているところもあった古典・名文を用いた教育方法を取り入れることにした。

古典・名文には日本語の美しいリズムがあり、それを視写、音読や暗唱することで美しい古典や名文の文脈の中で生きた語彙を覚えることができることに着目した。

古典や名文に触れることは、それはそのまま我が国の文化を学ぶことであり、今後の人生を豊かにする教養にもなる。

平成２５年度に先ず公募でモデル校を数校選び、そこで先行実

施し、その結果をもって翌平成２６年度から全ての小・中学校で開始した。

また、この取り組みには、古典・名文暗唱ノートと呼ばれる教材が要になる。当初外部で作成されたものを使用していたが、更なる質の向上を目指し教育委員会独自で教材開発を行い、平成２６年度より使用している。結果、小・中学校のいずれでも国語Ｂにおける学力は向上し、早くも平成２６年度には全国平均水準までほぼ到達できている。なお、この教材費用としては、次年度にあたる平成２８年度で７００万円を予算計上予定である。

さらに、この教材は、市民から一般販売の要請がある程の出来栄で、今や市内外を問わず、北は秋田県、南は沖縄県まで幅広く問い合わせがあり、今年度分の一般販売用として用意した四セット２００部計８００冊は二か月で完売した。

国語Ｂの学力状況や無回答率が高いこと等、本市と重なることも多い姫路市の取り組みだけに、今後本市でも古典・名文暗唱ノートを取り入れた授業の導入を調査検討すべきであると感じた。

以上